

無砂昆布―日高昆布共販の幕開け

昭和六年三月、米国のシアトルへ向けて航海中だった貨物船千珠丸(六、五一五トン)が、えりも町歌露の海岸で坐礁した。積荷の三、三〇〇トンのクレオソート油、七〇〇トンの重油が、歌露を中心に東はえりも岬から、西は様似のエンルム岬付近までの磯を洗った。被害は日増しに広がり、二、三日たつと沖合二マイル(三、二キロ)までの沿岸域が油脂で汚染され、その表層から海底までのすべての海藻と魚介は酸欠のため死滅した。この年の昆布漁は絶望的になり、その上、数年間は資源の回復は望めぬこととなった。

これに先立つ大正十二年、第一次世界大戦、ロシア革命、シベリア出兵などによって暴騰していた昆布価格は、終戦のこの年、大戦中ずっと百石当たり九〇〇円前後だったものが三二〇円まで一気に暴落。この価格は横ばいのまま昭和五年までつづき、この翌年勃発した満州事変も価格の好転には至らず、遂に中国大陸での消費意欲の衰えと日本製品不買運動にあつて輸出は激減。このため価格はさらに下降を続け、ついに百石当り二四〇円に下落したのである。

このため輸出商品として、江戸時代以来名声を博してきた日高昆布は、販売面からも生産面からも窮地に追い込まれたのであった。ちなみに襟裳(えりも)様似両町の昆布生産高は、日高全体の六〇%強を占める。

これより少し前、まだ二十歳を越したばかりの奥重助は、この不当に一彼にはそう思えた―安い値段をなんとか解消したいと思っていた。とはいっても、仕込み先であるヤマジユウ浜谷からは十分すぎるほどの借り入れがある。着業資金から米、味噌、醤油にいたるまで、シーズン中の生活の面倒はすべてみてもらっている。これらに日用品々が現金で買うより二割ほど高くなっていることは、重助も知らないわけではない。シーズン切上げの秋には、生産勘定でさらに二割近いピンハネがあることも知っている。

「こんなことでは、どうにもならんぞ」とは思いつつも、昆布時期の終るまでの半年を自分で食いつなぐ金はない。年に一〇〇駄(約二〇石、三トン)の収量では、仕込み先への支払いを済ませば、年越しの餅代が出るか出ないかの追っつかつた生活である。昆布の始末を手早く済ませ、なんとか十一月前にはカレイ漁、年前には馬車追い仕事に入らなければ、次の昆布時期まで食えなくなる。父重次郎も同じように生活して来たのであり、月寒部落約四〇戸すべては、木挽きをしたり炭焼きをしたりして、奥重助と同じような暮らしをしていたのである。それは日高沿岸の小漁師たちすべての姿でもあった。

昭和に入って、生活はますます苦しくなった。どうにかしなけりゃという想いは浜全体にあった。とくに浅海(せんかい)漁業者ともいべき小漁師の気持ちは切実だった。昆布以外に主たる生活手段のないかれらにとって、手元の商品をできるだけ高く売る以外に、生活を守る方法がなかった。

一方、清国はじめ国内消費地のいずれもが昆布についた砂に苦慮していた。北海道の昆布が本州大都市に流入しはじめた三百年前から、砂取りの要請は生産地に対して何度もなされていたものの、それは一向に改善されてこなかった。時がたてばたつほど“これは昔から浜のしきたりだ”ということで、浜では面倒な砂落としをしなかった。それがここへ来てようやく見直されることになった。消費地の

強い要請が、たびたび道庁に寄せられるようになっていただけでなく、生産地そのものが貧窮にあえいだ結果である。

こうした消費地の要請を早くから耳にしていた重助は、自分の自由になるわずかばかりの昆布を、きれいに砂を落として小口の仲買人だった鮎屋こと大通五丁目の高畑に、これを持ちこんだ。高畑は高畑で、これを自分の名で消費地の商談会に送った。この昆布が評判を呼んだ。

これをきっかけに、重助は明くる年には、昆布小屋の裏にあった馬車小屋を作業場にして、富菜の萬次郎アチャポをはじめ、朝鮮からの出稼ぎ女など数人のデメンを使って、本格的な無砂昆布の製造に手を染めた。四尺の昆布を踵（かかと）でおさえ、投げ物の昆布を巻きつけた指で砂をこすり落とすのである。翌々年には昆布干場に砂利や燕麦ガラを敷きつめ、はじめから砂をつけないようにした。おそらく日高各地でそのような試みはなされていただろうが、浦河では奥 重助の試みが最初だった。

こうした内外の情勢に押されて、昭和七年にはこれまで各浜の漁業組合が単独で販売を行っていた昆布について、共同販売を行う日本で初めての組織、「日高漁業組合聯（れん）合会」（略称日高漁聯）が発足する。日高漁聯は各漁業組合の昆布を一括購入し、これを函館や各消費地の昆布業者に独占的に販売するのである。もちろん仕込み問屋も買付問屋も従来の権利が侵されるので黙ってはいない。日高管内に強い勢力をもっていた函館では、即函館海産委託問屋組合などを作ってこれに対抗する。

翌八年、道は北海道水産物検査規則を施行し、水産物検査所をつくって浜の自主的な検査業務を道直営に改め、強力な改良事業に着手する。これによって無砂昆布は次第に生産地に浸透して行く。無砂をはじめ、長さ、重さ、等級区分など、ほぼ現在の形になるのは昭和十五年頃である。生産者の窮状を契機として、浜は自らを助けるために、この時期に漁業協同組合運動の第一歩が記されていたのである。奥 重助等の仕事は、純粋に生活からの要請であったが、結果的にはその運動のさきがけとなったのである。

[文責 高田]

【話者】

奥 重助 浦河町月寒 明治三十八年生まれ

【参考】

漁協系統運動史 第一巻 昭和四十八年 (株)水産社
(社)日本昆布協会十周年記念誌「昆布」昭和六十一年 (社)日本昆布協会